雀

セツカ	×											
ウグヒス	×											
イヒジマメボソ	×											
オホルリ	×											
キビタキ	×											
コサメビタキ・	×											
サンクワウテウ												
サンセウクヒ	×											
ヒヨドリ	×	×		×								
キレンジヤク	×											
モズ	×											
キクイタダキ	×											
シジウカラ	×											
ヤマガラ	×											

目

ナミエヤマガラ												
シチトウメジロ												
メジロ	×											
ハクセキレイ	×											
セグロセキレイ	×											
キセキレイ	×											
タヒバリ	×											
クロジ												
アヲジ	×											
カシラダカ												
ホホジロ	×											
スズメ	×											
コカハラヒワ	×											
オホカハラヒワ	×											

イスカ	×	×	×		×	×	×	×
マヒワ								
ウソ								
シメ	×			×				
コイカル								
ムクドリ	×			×				
ホシガラス								
ハシブトガラス								

琵琶湖の鳥

カイツブリ

琵琶湖の鳥

十月の十六、七兩日の休みを利用して琵琶湖を周遊した。東京を立つた時は嵐氣味で、天氣もあやぶまれて居たが、大津に着いて見ると、幸ひにもどうやら晴らしい。

午前十時少し過ぎる頃、京阪丸に乘じて大津の港を離れた。

空は晴れ、日は暖かく船窓より射し込んで居るが、昨日過ぎ去つた低氣壓の影響を受けて波は高い。或は竹生島より多景島行

の船は出ないかも知れないと、ラウドスピーカーはうなる。

成る程、港を出ると波は次第に高くなつて來た。船首にかむる波は散つて船窓を打ち、船は大雨の内を行くが如くであつた。

然し、近江舞子と呼ばるる砂濱を左舷に眺める頃より、波間に三羽、四羽或は七、八羽と、小群をなして鴨が浮游して居る。多くは輕鴨であつたが、眞鴨の群も中にはあつた。船が近づくと、飛び立つて少し離れた所に降りる。餘り物おぢをして居らぬ。

竹生島に近づくに從つて其の數を增す。此處に一羽、彼處に一羽と鵜も見える。

竹生島に着いて見ると、はたして多景島行の船は來ない。止むなく再び元の船で歸る事になつたが、田中子爵の御注意で長命寺にて下船、それより小舟にて八幡に出で、汽車で彦根に行く事となつた。

再び京阪丸に乘つて竹生島を離れた船は、島を東から西へ一周して八幡に向つたのであつたが、竹生島の波止場を出て間もない頃、島の水面近い岩鼻の上に數羽の鵜が一群をなして休んで居た。例の兩翼を開いて日向ぼつこして居る鳥も二三羽あつた。それからずつと東側の島蔭には、三々五々鵜の群が水面に、泳いで居た。又、沖には鴨の群を此處彼處に見掛けたが、光線の工合で何種とも識別する事は不可能だつた。又島の北側で一羽のアマツバメが飛んで居るのを見た。

長命寺に着いてから、小さなモーターバーチで運河を八幡に上るのである。

此の運河の入口のあたりは一面の蘆原で、吾々關東者には潮來の風情を想はしめる。やはり潮來で見る樣なカイツブリが靜かな浮草水藻の繁る中に一羽、二羽と此處彼處に見受けられ、昔、此の湖を「ニホの海」と呼んだのもげにやと思はれた。眞鴨・輕鴨等も餘り船を恐れぬか、靜かに蘆の茂みの根元を泳い

で居た。

長命寺では、キンクロハジロガモの雄が一羽空を飛んで居た。

運河に入つてからは何を云ふても河幅が狹いので、鴨もニホも見かけなかつたが、兩岸の谷地にキセキレイがチチチチと鳴きながら飛び交ひ、或は尾をヒクヒクと上下に動かし乍ら小走りに走つて行くのを屢々見た。唯だ一度、一羽のセグロセキレイが居たのを見た。又所々で矢を射る樣に一直線に水面低く飛んで行くカハセミの瑠璃色の背は艶に眼を惹いた。

此の運河は間も無く八幡の町に入つた。しかもセキレイは運河に沿ふて隨處に見られた。此の町の運河に沿ふて立ち列んだ家の殘り物は運河に捨てられるものと見え、これをさらはうとする鳶が中々澤山に居る。或は大きな藏の屋根にとまり、或はゆるゆると圓を描いて空を舞ふ。時に獲物を見出し、さつと運河の水面に舞ひ下り、これをつかんで空に上るものもある。

猶、竹生島から長命寺に至る途中、遙かに白石といふ岩が湖上高くそびえてゐる。鳥糞の爲め、白くなつて居るのだと云ふ。多分、鵜の糞で白くなつて居るのであらう。

不覺にも私は出發の際、非常にあわてて家を出たので、双眼鏡を持參する事を忘れた。近眼の者が眼鏡を落したと同樣、極く近くの外は何も見る事が出來ず、至つて不完全な觀察に終つた事を憾みとする。

臺灣鳥日記

昭和八年十一月二十七日に初まり十二月十八日に終る約三週間の旅に見聞せるもの、思ひ出すままに記したのが卽ち此の鳥日記である。

出發

十一月二十七日は朝來晴れ渡つた上天氣であつた。正午神戸港を出帆。港内を見るに鳥多からず、僅かにユリカモメが彼方此方に飛び交ふのみであつた。但し川崎造船所のガンドレイクレインのリギングに止まる鳶には驚いた。其の數五六十羽、燕の如く互ひに身を寄せて居る。かかる多數の鳶が一所に集り止まるを見たのは私の初めての經驗だつた。

航行中

天氣續きで、愉快な航海だつた。二日目頃より船に鳥が付き出した。イソヒヨ、アヲジ、ホホジロ、キジバト等は其の主なるものである。何れも疲勞して遠く飛ばず、アヲジ、ホホジロは甲板に積まれた新年用の酒樽の間を出入し、キジバトはリギングやボートの間に居て、遂に基隆まで來てしまつた。今日では此の樣な風にして、鳥が甲地から乙地に移る事があるのを知つた。

臺北

臺北は平原の中に在る市である。周圍は一面の田だ。田には、少い時だと云はれて居るが、白鷺が丁度東京近邊で見る程の數は見られた。田には牛の代りに水牛を用ゐて耕して居る。水牛が進むと田に生えて居る草から飛び立つ昆蟲を、烏秋（オーチウ）と云ふ黑い椋鳥程の尾の長い鳥がスーイと飛んで行つて捕へ、畔に立つて居る竹の頂き、傍の樹木の枝、或は電信線に止まる。又タカサゴモズと云ふ、內地のモズより大型で、頭部が灰白色、背は鮮褐色、腹は白の美しいモズ

が、丁度内地のモズのするのと同じ動作をやつて居る。

町の中には澤山の樹木がある。中には雲をつく樣な巨木も少くない。其處へはシロガシラが來る。彼地の人はペタコと云うて居る。ヒヨドリに屬する鳥であるが、鳴聲は全く異つて「グルーグルー」と云ふ樣に聞える。

ヒメメジロも多い。動作は内地のメジロと同じだが、只だ鳴聲が少し低い樣である。

カノコバトも屢々見受ける。内地のキジバトに代る所である。淡水河に近い邊の森には五位鷺も見られた。

野鳥ではないが、郊外邊に行くと家鴨が澤山に居る。其の中に、家鴨とムスカビーダックの混血兒が屢々見られた。其の中には、嘴が紅色で、頸や背に紫藍色の光澤を有する極めて美しい色彩をした鳥があつた。又、池や溝や川等にはカハセミが附き物の樣に居るのを見た。

鷺鷥鼻燈臺

臺北を夜汽車で立つと、高雄附近では日がたかだかと登り、冬とは思へぬ暑さが感じられた。

强い朝日に照らされてカノコバトが飛んで居る。かれた田にスックと立つムラサキサギは誠に見事なものだつた。

潮州で下車し、それからは自動車で旅行した。途中の並木にセンダンを植ゑた所があつた。もう葉は落ちて、黄色い實が澤山なり、それにシロガシラが付いて居た。道の兩側に現れて來る溝には、相變らずカハセミがチョコナンと坐つて餌をねらつて居る。

南勢湖と云ふ駐在所で晝食を攝つた。此處は海岸に在つて、景色が極めて良い。海にはテッパイと呼ぶ竹製の小舟がアンペラの帆に風を胎まして靜かに行く。海岸には花の大きな色も濃いヒルガホが咲いて綺麗である。駐在所の庭に

は熱帶植物が綠々と茂り、イカダカヅラの紫紅色の花、眞紅のショウジ・ウ木の葉、其の間を縫うて飛ぶ大ツマベニ蝶、それに駐在所へ交換の爲に出て來た生蕃が屋後に散見せるさま、此處で初めて臺灣に來た思ひをした。

恒春では林業試驗場を見學。此處で熱帶的の森林を初めて見た。樹木は悉くそれで、谷渡りやつる草が生ひ繁つて居る。其處にクロヒヨドリやクロガシラ、ヒメマルハシ或はゴシキドリが樹間を渡つて居た。ポコン、ポコンと云ふ五色鳥の聲を初めて聞いた。

試驗場を出て燈臺に向ふ。其の林と分れて草原に入る所で黃鳥を見た。南國の眞青な空に濃黃色の黃鳥は美しい取り合せであつた。

燈臺附近は一面の芝原、それに澤山の雲雀が居て、天空より美しき囀りを吾吾の頭上に落した。

阿里山

嘉義を發し森林鐵道で登山する。此の山道の模樣は已に多數の人々によつて紹介されて居るから、鳥に就てだけ書いて見よう。山の下の方は熱帶性の植物が多く、其處に棲む鳥も熱帶を發源地とする種類が多いが、段々登つて行くと森林も針葉樹が多くなり、鳥も高山性を帶びて來る。

阿里山の營林署に宿つた。宿の附近にはアリサンビタキ、アリサンチメドリ、コウグヒス、或はキバラシジフカラ等を見受けた。又宿の裏の一寸した谷、其處の倭樹と笹で覆はれた所には、澤山のキンバネホイビー、ミミジロチメドリを見た。一寸我國のヒヨドリとカシドリを交ぜ合せた樣な動作をする鳥である。此の地で又タカサゴミソサザイを見た。雌雞が雛を呼ぶ樣な聲で、小さな鳥の割に存外大きな聲で鳴いて居た。神木驛ではかの愛らしきツアカガラ、生蕃人が其の鳴聲で出獵の可否をきめると云ふメジロチメドリがいづれも十數羽乃至數十羽の群をなし、一團一團と林を渡つて居る。アリサンビタキ、カハビタキ

は單獨に彼方此方の樹蔭に姿を顯す。又樹上には、ベニサンセウクヒが綠の葉に眞紅眞黃の羽を飜して飛んで居る。ミミジロチメドリは、whip you, whip, whip you と高い樹枝の上で鳴いて居る。ゴシキドリもコロコロと之に和して居る。阿里山は最も容易なる鳥の觀察場である。私の行つた時は冬で、高地の鳥が此邊に下つて居たから、此等の鳥を見るには絕好の機會であつた。

日月潭

臺灣で手近に行ける唯一の湖である。モーターボートで湖水を一周する。其の淺いのには驚いた。此處で見た鳥は勿論主として水鳥である。臺灣で水鳥を觀察するには此處が最も良いと思ふ。淺瀨にはコモモジロ、チウサギ、コサギ等が數羽の群をなして散在し、カイツブリが水に浮いて居る。水の深い方にはウ、カルガモ、マガモ等を見た。マガモは臺灣では初めての報告と思ふ。又ミサゴも此處で其の勇姿に接した。

此處で面白い目に會つた。それは、案内の人が此頃ツルが一羽來て居ると云ふ。今日も來て居るかも知れぬと云ふ。其の來ると云ふ所へ行つて見ると、はたして居たが、それはツルでなくてアヲサギであつた。アヲサギで思ひ出したのは、ムラサキサギで、此の鳥は潮州の郊外に殘る原生林に群をなして蕃殖して居る。私の訪ねた時は日中であつたので、鳥を見る事は出來なかつた。古巢の二三を木の間に遙か望んだだけだつた。

八仙山

八仙山へは臺中より行くのである。道は溪に沿うて登るのであるが、其の風景は誠に見事である。此の溪流は相當に大きな川で、大丈夫隅田川位はある。然し水は淺く、青く澄んで居る。此處で私はナベコウ、ウ等を見た。ナベコウが大きな翼を擴げて中空をゆるりゆるりと飛んで居る樣は雄大其者だつた。

佳保臺の營林署のクラブに宿る。宿の周圍の溪流にはカハビタキが居て、内

地のジャウビタキを聯想させる。裏のススキ原より飛び出して電信の針金に止まるカヤノボリはルヽと鳴く。林にはヒメオウチウが夕日に藍色を輝かせて美しい。溪流の兩岸の森林からはテッケイの鳴聲がしきりに聞えて來る。同行者曰く、あの中には本ものと假りものがあると。理を聞けば、ホイビーが巧みに眞似をするのださうである。

ピヤワイの見晴臺に登る。其の途中、カンムリチメドリの群に逢ふ。一寸カラ類の樣に見える。見晴臺ではタカサゴホシガラス、タイワンオホアカゲラ、タイワンヒガラの如き高山に居る鳥を見る事が出來た。此等の鳥は、內地の亞種と動作に於ては變る所がなかつた。

花蓮港

蘇澳より有名なる東海岸道路を行く。其の風景の雄大なる天下に絕して居るが、ドライヴ中は餘り鳥を見掛けなかつた。只イソヒヨが良い聲で彼方此方に鳴いて居るのと、ヤマムスメが一羽道を橫切つて森林から森林に飛んで行つたのを見ただけであつた。しかし此の道路を終つて平凡な平地に入るや、鳥は面白くなつて來る。シロガシラはクロガシラに變り、畑にはツメナガセキレイが黃ろい體を黑い土の上に走らして居る。西岸では少しも見られなかつた鳥も澤山畑に下りて居る。燕はリュウキウツバメである。カヤ原にはバンケンやダルマエナガが居る。目先が變つて愉快であつた。

タツキリ溪

其のゴルヂの雄大なるに名ある所。溪流に沿うて登る。河にはタカサゴカハガラスが見える。山道の傍に茂る倭樹の藪にはアヲチメドリが居る。黃綠色の軟き色をした上部と眞白な下部、鮮かな肉色の脚、頭の羽を冠のやうに立てる可愛い鳥である。バタガン宿舍に近づくと、溪も淺く、河原にはテッケイを屢屢見る。然し此の行は雨の爲、鳥は殆ど其の姿を顯さなかつた。

以上で大體私の臺灣旅行の鳥日記は終つた。甚だ大ざつぱなものであるが、歩いた距離に比して日數が少く、所謂飛脚旅行だつた爲、觀察の不充分だつた事は免かれない。併し此の僅かな旅でも、相當に澤山の鳥を見る事は出來た。臺灣も鳥が少くなつたと云はれて居るが、それでも内地に較べればまだまだ繁富で、愛鳥家の觀察には便利此上もない。

もう臺灣も飛行機によれば極く短時日で行かれる。戰爭でも終つたら、杖を此の南方に引かれん事をおすすめする。

大島の放飼動物園

昭和十年五月十一日より十二日にかけ、野鳥の會の膽煎りで、大島の放飼動物園を見に出掛けた。

本園は泉津村に在つて、其の廣さ二千五百餘坪と云ふ廣大な地域を占め、樹木繁茂し、遠く海を隔てて伊豆の半島を望む風光明媚な場所である。

未だ道をつけただけで、動物園其のものはホンの手がついたまでだつた。

大島の放飼動物園

大島泉津放飼動物園にて

廣い柵の中に鹿・花鹿・山羊・綿羊等が放たれて居るだけであるが、其處に造られて居る廣大な猿山を見ては、此の園の完成された曉に如何なるものになるか、ほゞ想像が付いた次第だ。

そも〳〵此の放飼動物園と稱す可きものは、古くハーゲンベックがハンブルヒの在ステーリンゲンに柵の見えない動物園を造り、世界に其の名を馳せたのが最初で、ローマの動物園之に倣ひ、其後所々にかゝる動物園が出來る樣になつた。ロンドンやパリの郊外に出來た動物園の如きは、此種の動物園の尤なるものである。

此樣な立派な動物園は、私が歐羅巴へ行つた時には未だ出來ては居なかつたが、英國のベッドフォード公爵とかエッラ氏、或は佛國のデラクール氏、和蘭のブロー氏の如き人は自己の庭園の一部を金網或は鐵條網で仕切り、その中で鳥獸を放飼して居た。此等の人のは先に云つたハーゲンベック式とは異り、只だ放飼して居るので、或は大島の夫れと同じ行き方であるかも知れぬ。

私はエッラ氏とデラクール氏の所へは屢々泊りがけで行き、一番記憶に良く殘つて居るので、兩氏の夫れを少しく述べて見ようと思ふ。或は之が大島の動物園の參考ともなつたら幸甚と思ふ。

エッラ氏の庭園は、英國のサーレーのコバムに在るフォックスワーレンパークで、小さな丘陵より成る牧野（大部分は草原）の此處彼處に、一團の樹林がある。春はヘザーが紫紅色に咲き亂れた美しい所で、廣さ三千エーカーもある。此の廣い牧野が彼のエステートで、其の內の一部分は庭園になつて居て、花壇や泉水等があり、氏の住家もあるが、其處には孔雀や冠鶴、姉和鶴、それから二三の家鳩の種類が放飼してあつた。此の冠鶴や姉和鶴は小型の鶴で、しかも芝草をつゝく癖が他の大型の鶴の樣に甚しくないので、此の樣な庭園に放飼にしても庭を破壞する事がなく、其點、誂へ向きだとの事である。又、他の一部

には廣大な禽舍や熱帶の鳥を冬季入れて置く小屋などがあるが、之は問題外であるから省くとして、次に眼目の放飼場に就て申せば、此處は廣い範圍を荒い目の金網で圍つてあり、其の中は大樹の一團や、若木の林、ブッシュやシュラブ等が所々に散在して居る草原で、中に小さな池もある。其の中にはワラビーと云ふ小型のカンガルー、羚羊、色々な雉の類等が放飼されて居た。相當に馴れては居たが、手から餌をもらふと云ふ樣なものはなかつた。羚羊や岩鷸鴫は草原に出て日光浴をして居たりして良く人目に付いたが、雉の類は皆ブッシュの中に居て、此方は極く靜かに物蔭に休んで待たないと見る事が出來なかつた。然し、かやうに放飼された雉は實に立派なもので、虹雉や銀鷄・錦鷄等は籠飼ひのものとは見ちがへるほど光り輝いて居た。しかもかゝる美麗な色彩がピッタリ周圍に調和して、餘程注意しないと見付け出せない程だつた。又此の柵の內には大鶴が放してあり、それが悠々と歩いたり、羽搏きしたり、大きな圓を畫いて中空に翔る樣は、見て居て氣も晴々する想ひであつた。

佛國デラクール氏の夫れは、恐らく世界で第一位に推されるものゝ一つであらう。面積は內圍だけで三百エーカー、外圍も入れゝば三千エーカー程もあり、かのジョアンダルクの火刑になつたルアン市に程近いシャトークレールに在る。之も小さな丘陵のある其の谷間に、一寸井ノ頭の池を想はせる樣な清水をたゝへた井ノ頭と同じ位の大さの池があり、其の岸や丘の上などに鬱蒼たる森があり、森と森との間は靑々とした芝原で、見るからに晴々とする景色である。私の行つたころ其處に放されて居た動物は、カンガルー・豆鹿・羚羊、鳥では白化せる亞米利加駝鳥・印度孔雀及び眞孔雀・寶冠鳥・鍛七面鳥、色々な雉類、鴨・雁の類、紅鶴、二三の千鳥の類、鵠類、金剛鸚鵡等で、今は獏、手長猿等も放飼されて居るといふ。獸類は何れも溫和な性質のもののみで、羚羊の類を多く飼つて居るのは、羚羊は鹿と違ひ木の皮を餘り喰はず、園の木を枯らす虞

れがないからだと云ふ事である。特に此の園で私の不思議に思つたのは、金剛鸚鵡が一本の大木に放飼してあるのだが、翼でも多少切つてあるのか外の木へも行かず、高い頂きに止まつて溫和しくして居り、時々例の大聲で呼ぶ外は、時々ポツリ〳〵と葉を喰ひ切つて落すのが分る位で、それ程木を害して居ないことだつた。かの何でも強大な嘴で齧り散らす金剛鸚鵡には不思議な事だと思はれた。更に面白く見たのは、濠洲に産する鍬七面鳥と云ふ塚造りの一種が、雜木林の中に美事な塚を造つて居た事だつた。庭の一部には小禽類を入れた廣大な禽舍や、雉類の廣々とした禽舍の一團があつた。今は又大きな溫室禽舍を造り、其の中では熱帶のどつちかと云ふと弱い質の鳥を飼養して、其處で八色鳥等を巣引したとの事である。蜂鳥等も澤山に飼つて居るといふ。

次に和蘭のスグラーフェンに在るブロー氏の夫れに就いて述べて見よう。此處は和蘭の事とて前二者と異り全くの平地で、池や沼が所々にあり、屋敷の入口から母屋に行く迄には長い立木のアベニューがある。其の木には蒼鷺の巣が群團をなしてゐた（ヘロンリーと云ふ）。氏の話では、蒼鷺も鵜も木の枝で巣を造る、鷺は嘴に力がないから枯枝しか折れない、鵜は嘴に力があるので生枝を遠慮なくへし折つて巣を造る、此處では鵜は木を害するから鐵砲で撃ちはらふのだと云ふ事だつた。此の國では水が自由なので、鴨・雁の類を數多く飼つてあつた。其の内に北米産のトランペター・スオンと云ふ我國の大鵠に似た鳥が居た。此の鳥は故郷の北米では殆ど全滅をしてしまひ、今では此の園で出來た鳥が北米の動物園へ送られて、觀覽者の眼を喜ばして居るといふ。

此の園では他の處よりも野鳥が多く見られた。ことに和蘭の名物の鶴（朱嘴鶴）が沼の中にしつらへた木製の臺（十數尺の幹の上に平板がのせてある）の上に巣を造りかけて居たのは愉快であつた。獸類は餘り澤山は居なかつたし、其の飼ひ方も、鐵條網で圍つた廣い柵の中で一双か二双放し飼ひになつて居る

だけであつたが、獅子そつくりの聲をして鳴く角馬や綺麗な彩りをした大型の羚羊、亞米利加駱駝、獸でないがエミユも居た。此のエミユと云ふ鳥は巣につくと前後を忘れて熱心に抱卵するもので、鼠に背中を喰はれても抱卵して居ると云ふ。事實、小屋の片隅に背中を酷く負傷したエミユが熱心に抱卵しながらけゞんさうな眼で此方を見て居た。此處の大物で特記す可きは、歐洲產の野牛（バイソン）で、之は帝政ロシア時代、コーカサスに保護されて生存して居たが、革命後其の肉を喰つたので殆ど全滅したとの事、氏は、米國で一時絶滅しかけた野牛が人手によつて再び增殖された樣に、歐洲の方のも同じ運命に盛り返すべく飼つて居ると云ふ事だつた。かの英國のベッドフォード公の所の四不像や、此處のバイソンやトランペター・スオンの如く、有志の手によつて世界より消え去らんとする動物を喰ひ止め、學術界に貴重な研究資料を殘すと云ふ事は、實に貴い企てであると思ふ。

話は大變横道にそれたが、私の大島の動物園に望む所は、あれ程大規模のものであるからには、少し金が掛つても猛獸柵の一二ヶ所、それから象・犀・河馬等の大動物が悠々と野生其儘に漫歩し得る樣な所、麒麟や斑馬・羚羊・駝鳥等の居る草原などを造り、配するに彼方此方に小鳥の棲みさうな林——良く下草を生やし又鳥の好む樣な實の生る木を植ゑたもの——を造り、又休息所の附近はオープンプレースとし、其處で餌を播けば孔雀や鶴や鳩や小型の鹿やカンガルーの樣な、人に餘り危險のないものが出て來て其の餌を喰ふと云ふ風にしてはどうかと思ふのである。そして又園の所々に美麗な花の咲く草や木を植ゑて、園を華やかにしては如何かと思ふ。

又、其のすぢの人のお話では池を造ると云ふ事だから、其處には鵞鳥や家鴨の樣な家禽でなく、世界各國の美しい色彩を有する雁や鴨の類を取寄せて放したら面白からう。

世界の二大自然科學博物館

博物館・圖書館・動物園――この三つは、その設備の良否に依つてその國の文明如何を知ることが出來ると云はれるほど、國家に取つて重要なものである。日本に於いても、博物館は御維新になつて間もなく置かれたもので、既に半世紀以上の歴史を持つて居る。上野公園に東京科學博物館が出來たのも、日本の博物館の發達史に於ける一進歩と見ることが出來る。しかし、まだ〳〵改善整備すべき點が尠くない。多少他山の石にでもなるかと思ひ、世界の二大博物館と言はれて居るニューヨークの博物館と、ロンドンの博物館とに就て簡單に話をして見よう。

博物館と言へば、讀者諸君もその名を聞いて直ちに頭に浮ばれるやうに、極く初めは自然科學と歴史美術との總てを網羅し、これを陳列して一般の人に見せたものであるけれども、だんだんにその蒐集品も多くなり、また夫々の專門が進むに從ひ、自然科學と歴史美術との二つに分れるやうになつてきた。更にそれがイギリス・アメリカ・フランス・ドイツ・その他ヨウロッパ各地に於いても、一層分科的となり、博物に關するもの、化學工業に關するもの、歴史美術に關するもの、兵器軍事に關するものと云ふやうに、いろいろの種類に分れ、そして各々己が目指す所に從ひ廣く深く發達して來たのである。

茲に述べようとするのは、ニューヨーク及びロンドンの博物學に關する博物館に就てである。この兩都市の博物館は、動物、植物及び鑛物の三界を含んだもので、いづれも一世紀近くの歴史を持つて居る。

ニューヨークの博物館

ニューヨークの博物館は、中央公園（セントラル・パーク）に極く近い靜か

な町に在る。大きな建物で、外觀は宛然西洋の城を想はせる。周圍は美しい芝生で圍まれ、內部は陳列場も、研究所も、整然と完備して居る。この博物館は或る學會に依つて維持されて居り、國家や市が設立したものではない。

その特長とするところは、動物の棲息して居る狀態を標本と繪畫とでパノラマ的に原地と同樣に造り上げ、觀る人をして、その動物がどんな處に棲んで、どんな恰好をして居るものであるか、またどんな巢に棲んで、どんな風に子を養つて居るか、またその子にどんな餌をやつて居るかと云ふことを、一目して分るやうに拵へてある點である。初めはアメリカ內地の動物の生活狀態を示しただけであつたが、現今では熱帶或は寒帶の動物の生活狀態まで、模型を造つて現はすやうになり、また單に陸上ばかりでなく、海底の有樣とか、また珊瑚礁のある海岸の有樣とかいふやうなものまで造り、そして一般の人々に海の底はどんなものであるかとか、珊瑚礁とはどんなものであるかとか云ふやうなことまで知らしめるやうになつた。卽ち野外に行かずとも、又原產地に行かずとも、博物館に足を運べば生物の天然に於ける狀態に接する事が出來るのである。

但し、これは此の博物館の一方面であつて、此處では又一方に於いて非常に完備した研究室を持つて居る。この研究室は、その會の會員とか、その紹介を受けた人だけしか入ることが出來ないけれども、それ等の人には實に至れり盡せりの研究が出來るやうになつて居る。標本は勿論のこと、それに關する圖書の如きも完備して居り、またここに勤めて居る館員なども、自分の當つて居る仕事に對しては、極めて深い經驗と知識とを有し、その研究者をして勞力を無駄に費すことなく十分に研究せしめることが出來るやうになつて居る。

故に、博物館に行けば、極く僅少なる經費の下に最も多量の研究材料を得て、十分に研究し得るわけであるから、研究者に對して非常な利益を與へるものと言ふことが出來る。

倫敦の博物館

ロンドンの博物館の方は、設立の日も稍々舊い爲め、建築も舊いし、陳列方法もニューヨークに較べては舊式である。しかし、現在の日本の狀態から考へて見れば、ニューヨークの設備は餘りに金が掛かり過ぎて居り、直ちに以て日本の博物館に應用することは或は困難かも知れないが、このロンドンの陳列法の如きを用ゐたならば、ニューヨークほど完全とは行かなくとも、現在の日本の陳列法よりは遙かに自然に近いものであるから、寧ろ採つて以て範と爲すに足るものと思はれる。

この方法は、從來の如く陳列棚の中に動物標本を飾るのであるけれども、その動物の周圍に、簡單に、しかも最も適切に、その動物の棲んで居る場所の模型を造り、そしてその動物を自然の位置に見えるやうに造つてあるのである。一例を言つて見れば、エルクと云ふ北部ヨウロッパに居る大鹿の標本があり、それには牝と牡と仔が居る。その附近には北歐の森林の中のやうに、白樺や落葉樹の朽ち倒れたものをあしらひ、枯葉とか、北部ヨウロッパの森の中に生ずる草などを模型で現はして居るのである。また、鳥ではケワタガモ――これはヨウロッパに居る海鴨で、草原に自分の胸の毛を拔いて軟かい蒲團のやうな巢を造り、その中に卵を產んで雛を孵すのであるが――の如きも其式の陳列法で、その標本の函には草があつて、其所に巢を造つて、雌はその上に卵を抱いて居り、雄がその側に居ると云ふやうな、一群の像を造つて入れてある。また、壁に寄せかけた棚には、その壁寄りの方に斷崖を造り、それへ種々の海鳥をあしらつて居る。ニューヨークのパノラマ式の陳列法から見ると見劣りはするが、しかし觀覽人はどんな場所にその動物が棲息して居るかを簡單ながら知ることが出來る。

その他、ロンドンの博物館には案內人があり、時間を定めて、或る部門部門

に就き、例へば獸類の處とか、前世界の動物の處とか、或は植物の處とか云ふやうな場所を定め、其所に客の集まつたとき、陳列してある標本に就いて、極めて分り易く、且つ面白く說明して歩く。その案内人はそれ等の陳列品に付き相當の知識を有して居り、觀覽人の質問ぐらゐには十分の返答が出來るだけの素養を具へて居る。

斯う云ふ風に、一般觀覽者に對しては知識を普及するやうにして居るし、またニューヨークと同じやうに研究室が特別に設けられてあり、紹介を得れば誰でもその中に入つて十分に研究することが出來るのである。

ロンドンの博物館では、博物館そのものに十分な信用があるから、外國の博物館からも貴重な標本を貸して呉れる。卽ち或る種のものを研究するにロンドンに居ながら各國から標本を借りて來ることが出來るので、甚だ經濟的に研究し得るのである。

斯樣な設備は、單にニューヨークとロンドンばかりでなく、米國ではワシントンに於ても、シカゴに於いても、ボストンに於いても、ピッツバーグに於いても見ることが出來る。また英國では、ノーリッチやエヂンバラーの博物館、獨逸ではベルリンやウキンの如き博物館に於いても同樣の設備を見ることが出來る。

すべて歐米では、博物館の仕事は二つに分れて居る。一は陳列品を完全に、成るべく自然のやうに拵へて、他では見られない博物學上の生態の有樣を一般人に見ることが出來るやうにすることと、今一つは、博物館に行けば完全な研究が出來るやうな研究室を備へると云ふことで、この二つが歐米に於ける一流博物館の二大目的となつて居る。各館ともこの二點に向ひその完全を期すべく大いに努力して居るのである。

日本に於いては荒物屋式の博物館が漸く自然科學と歷史美術方面とに分れる

やうになつた。しかし、この科學博物館の内容が充實し完備して來た曉には、どうしても專門的な大學卒業程度の人に磨きをかける博物館と、科學思想を起さしめる樣なポピュラーな科學博物館の二つに分れるやうになると思ふ。一日も早く斯樣な完備した二種の博物館が分離して出來上るやうになりたいものである。

私と鳥

私は今では鳥に生き、鳥に死すると云ふ樣になつてしまつたが、別に鳥の腹から出た者でもないので、オギアッと生れた時から鳥好きであつたとも思はれない。

よく人から「どうして鳥が好きになつたか、又いつから鳥が好きになつたか」などと尋ねられることがある。しかし私はいつでもこれに答へて「分らない」と云ふてゐる。

實際、私には劃期的に何時からとか何故にとか云ふ事は記憶にない。然し、今少し閑を得たので、過去の記憶をたどつて見ようと思ふ。

私の幼兒時代に居た女中に聞いた話によると、私の極く小さい時は魚が好き

であつたと云ふ事である。然し、之れは全く私の記憶にない事だ。

その後、五つ六つ位の時と思ふ。ヂフテリーになつて赤十字社の病院へ入つた事があつた。大分良くなつたので、避病院から普通の病室へ移つた。從つて、見舞に來るのも自由になつたので、度々家から人が來た。その時、チョク〳〵父親から見舞として剝製の鳥の標本を一個づつ贈られた。餘りそれを玩具にしたので破損してしまひ、今は一つも殘つて居らぬが、その内にダイサギ、ハイタカの二つのあつたことは今も明かに記憶に殘つてゐる。その後、小學の一年生位の時、父が習志野の御獵で捕れた一雙の雉を拜領したのを剝製にして呉れたことは餘程嬉しかつたと見え、今でも記憶してゐるが、その標本は破損して殘つてをらぬ。なぜ斯樣に標本を破損させたかと云ふに、一つは標本が蟲害にあつたことゝ、今一つは良く標本を庭へ出して植込みの中とか庭石の傍などに置き、自然の樣に見せて樂しんだものだが、そのとき猫に襲はれて破損したのもあつた。又その頃、上野公園や本郷の或寺の所に勸業場——今のデパート見た樣なものがあり、よくそこへ行つて學校の成績の良かつた褒美に買つて貰つたことを覺えてゐる。その頃のことだが、本郷の勸業場にツノメドリの標本があつた。欲しかつたが、附添ひがその異樣な姿を嫌ひ、何か記憶に殘つてもゐない樣な普通の鳥を代りに買つて濟ませてしまつた。これは未だに殘念に思つて居る。

この樣に標本は大分買つて貰つたし、又好きでもあつたが、博物館とか動物園へ行くことは嫌ひであつた。それには大いに理由がある。私が未だ學校へ行かない前と思ふ、一日、動物園を訪れたら、熊が病氣のためか損傷のためか知らないが、顏が脹れ上つて二眼とは見られぬ樣になつて居た。いはば熊の累と云ふ奴を見て慄へ上り、それからと云ふものは動物園と聞くだけでもう顏色を變へた程であつた。ところが恰度小學一年の頃、學校から動物園へ遠足があつ

た。その時、故意か偶然か知らないが、先生が象の前で「集まれ」をやつた。私は逃げるに逃げられず、象の前で氣を付けをやつてゐる間に、象が段々怖くなくなつて來た。この時以來、動物園は怖いどころか好きになり、遂に病み付きとなつて、一生動物の研究で暮すことになつてしまつた。

生きた鳥を飼ひ出したのは何時頃からかと考へて見ると、私の父は馬が大好きで、當時「牧畜雜誌」と云ふのがあつて、それに馬のことが出てゐるので、父は、この雜誌をとつてゐた。それに鷄・七面鳥・家鴨・家鳩など家禽の記事もあり挿畫もあつたので、私もそれを見て樂しみながら、又この樣な鳥を欲しくも思つてゐた。ところが恰度家の近くに鷄肉商があり、そこにウーダンと云ふ毛冠を有する鷄が一番ひ賣りに出てゐた。それをさん〴〵ねだつて買つて貰つたのが、そも〳〵私が生きた鳥を所有した初めである。又この鳥が良く卵を產み、それが又良く孵化したので、家人の興味をそそつたものと見え、その後、チャボや鶯鳥が飼はれる樣になつた。私はこれらの鳥を自分のものにして大いに喜んでゐると、一夜、野犬の爲に全部を失つてしまひ、一時鳥を飼ふ事は中止された。小學の終り頃、一時七面鳥とヲシドリを飼つたことがあつたが、永くは續かなかつた。この時、何でも七面鳥は日本銀行が出來上つて開行式があつたのでその料理に使用され、品不足で入手が容易でなかつたこと、又この七面鳥が女と見ると向つて來るので不人氣であつたところ、一日私の姉に酷く向つて來たのがもとで私の學校へ行つて居る留守にお拂ひ箱になつたこと、又ヲシドリは雄が雌を殺してしまつて殘念でたまらなかつたことなどを記憶してゐる。

現在の標本と生鳥の集め初めはと云へば、それは私が中學を出てからで、標本は、横濱に居たオーストンといふ英人の標本商人から分れた永興といふ店から月々ポケット・マネーの一部をさいて買ひ出したのが初め、又生鳥は金魚を

飼つた疊一疊敷ほどの水槽の上に高さ三尺ほどの木枠を造り、これに金網を張つて十姉妹、文鳥、金華鳥、紅雀、金腹、ジャガタラなどを買つて放したのが初まりで、遂に今日に至つたものである。

この様な思ひ出を書くにはまだ年が足らぬと思ふ。然し人から良く聞かれることなので、一應書いてこれらの問者にお答へすることゝした。

"The Birds of Nippon" と私

私は今 "The Birds of Nippon" と云ふ本を書いて居る。此の本は自分の研究の結果を述べると共に、從來發表された日本に關する內外の論文記錄等を出來るだけ完全に集めて一書に纏めようとする意圖である。之は私が研究中色々な論文記錄を見るに、彼方に二三枚、此方に五六枚と云ふ風で、夫等を一々見るには時間もかゝるし、骨も折れる處から、こんな事に研究者が手間を取るは勿體ない、今これを集めて置けばこれからの人は手がはぶけて良からう、と考へて取りかゝつたわけである。

その間、色々と感じた事を少し書き綴る事とする。

日本の鳥の事はツンベリイやケンベル等の本にも出て居る。短い旅行中の見

聞を書いたもので、今日から見るとたわいもないものであるが、ケンペルが「火器を弄する事を禁じられてゐて採集の出來ないのは殘念だ」と記して居るのは、當時の日本の有樣が思ひ合はされ、此道の研究者の殘念さも想像が出來て面白い。

次はジーボールトだ。この人が千八百年の初めに來て色々と手を盡して標本を集め、之を和蘭に送り、テンミンクとシュレーゲルが研究して發表した。兩氏連名の發表だが、實は主としてシュレーゲルが研究したものである。

當時の事をシュレーゲルが記したもので見ると、テンミンクとの仲は餘り良くなかつたと見える。テンミンクは標本を戸棚にしまひ込んで錠をかけて見せなかつたと云ふ事である。何處の世界にもよく有る話であるが、テンミンクの樣な當時世界の鳥學界をリードした人であり乍ら、此樣な事が有るかと思ふと、如何にもけち臭く、よい耻さらしだといふ氣がする。

私がライデンへ行つた時、このジーボールトの送つた標本を見たが、何れも本剝製で良く保存されて居た。然し其處に貼つてあるラベルは採集當時のものでなく、後で附けたものなので、標本の價値の著しく減じた事を思はせられた。日本の鳥の標本に就てはジーボールトの外に、彼の助手をして居たブルーガーと云ふ人も、中々澤山の標本を送つてゐるのを知つた。

標本の事で思ひ出すのは、私が歐米を巡遊して居る時に出會つた事――獨逸のフランクフールトアムマインに在るシエンケンベルグの博物館の話である。此處の鳥の標本は、ハーベトロジストの手にゆだねられて居る。當時、獨逸は今日よりはずつと貧乏で、博物館にも充分金が無かつた時であつたが、其の先生は金の多分全部とは行かずとも大部分を自分の專門に使つて居たと見え、蛙の生きたのを南米から種々取り寄せて飼つて居た。が、鳥の標本は防蟲劑もろくに入れて居らず、或る鸚鵡のタイプ・スペシメンを出して見ようと思つたら、

羽がぼろぼろ落ちるので止めてしまつた。この樣なキュレーターは博物館にはどうかと思ふ。

序ながら、日本でよく各自の所有する標本を一堂に集めてはと云ふ說を屢々聞く。充分に理由の有る事と思ふが、かの關東の大震災の時に粕山氏や農林省の標本が燒けた事、黑田博士及び私のが助かつた事や、大學の圖書館の如き防火設備の有るもので丸燒けとなり、取り返しのつかぬ事をしたりした事から考へて、日本では、標本の如きは同じものが有る場合は之を分散して置く方が國の爲、學問の爲と考へる。

私が本を書いて居る時に閉口するのは露西亞文である。然し日本では比較的樂に之を讀んでもらふ事が出來るが、英國に居た時は不便をした。英人の鳥友に敎へてもらひ、私はソベートの宣傳部に行つて見た。其の英人の依賴した時は英國がまだソベートを認めなかつた頃なので、本國から金を取り寄せるにも不自由で、此の樣な內職をして金を得て居たのであるが、今は承認されたので大びらで金も取り寄せられ、內職は止めたとの事、大いに落膽した。が、さる日本人の紹介で或る飯屋の主人に依賴する事にした。之を其の英人の鳥友に見せた所、例の宣傳部の譯より上手との事、後で其の主人の身がらを探つて見たら、以前英國にネーバルアッタッセーとして來て居た露西亞海軍の將官の成れのはてゞあつた。

英國人の中には、今でも商賣をはなれて自己の職に忠實なる人を見る事がある。"The Birds of Nippon" の原稿を集めて居る時、英國のエシアチックソサイチーの圖書室へ本を見に行つた所が、其處には無かつたので、其のまゝ歸らうとすると、二三日たつたら又來いと云ふので、不思議に思つて尋ねて見たら、自分は其の本はまだ知らなかつたから自分の知識の爲に心當りを尋ね合せて見るからとの事。不幸にもこれは其の人には分らなかつたが、後に英國博物

館の圖書館に在る事が分つた。

珍本に就ては、やはり鳥の本だが英國には無くて瑞典のストックルホルムに在る書物があつた。不幸にして機會が無くて見る事が出來ず、殘念に思つて居た所、丁度同地に居られた中井猛之進博士が之を寫して私に送つて下さつた。私は今、此の本の原稿を書く度に博士の御恩を鳴謝して居る。

ロスチャイルドのツリングの博物館の標本は、ブレームの標本が核心となつて、全世界の各地より集めたものが附加せられ、世界でも有數のものとなつたのであるが、數年前米國に身賣りした。ニューヨークの博物館で買つたのだが、之を陳列する室が不景氣の爲に建たなくなり、稅關倉庫に鎭座まして居た。其の内一部分は燒失したとの事。私がエヂンバラでイーグルクラークと鳥談に一夜をあかした時、「ロンドンの博物館は良い、今に世界一になる」と羨ましさうに云ふから、「何故か」と聽くと、「ツリングの標本が轉げ込むからさ」と答へた事を思ひ出す。その標本の運命を考へると、英國も米國も昔程でなくなつたかなと思はれる。

上野の科學博物館はロンドンのサイエンス・ミュージアムと同じ樣なもので、科學者の種子を作るには申し分のない所である。日本の樣な所には必要缺く可からざる設備で、益々其の發達を衷心より希ふと同時に、サウスケンジントンにあるナチュラル・ヒストリー・ミュージアムのやうに、芽ばえた者に磨きをかけ完成せしむる博物館があつてほしいと思ふ。今のやうに兼帶では駄目である。分れなければならぬ。博物館も研究者に引きずられる博物館でなく、研究者を引きずる如き博物館となることを偏へに希望するものである。

昭和十八年四月二十五日 印刷
昭和十八年五月 五日 發行 (二千部)

鳥と暮して
定價 貳圓

著者 鷹司信輔
發行者 福田喜三郎 東京市京橋區槇町三ノ五
印刷者 (東東一) 平野喜代松 東京市牛込區飯町七
配給元 日本出版配給株式會社
東京市京橋區槇町三ノ五
發行所 千歳書房
電話京橋(56)一、七八八番
振替東京八七七五番
文協會員一一七、五二一

出文協承認
第270002號

千歳書房

大日本印刷株式會社槇町工場印刷

942
91

15年 6月 4日

間十	間三	間十							

終